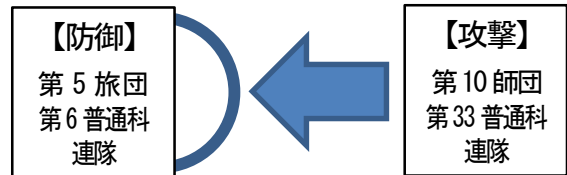


「実動対抗演習」の説明会に平和委から5人参加(9/2)

2日、午後1時半から演習場内の自衛隊しょう舎で、「北海道訓練センター第2回運営（第10師団=名古屋=と第5旅団=帯広=による実動対抗演習）」についての説明会が行われました。矢白別平和委員会から上出会長はじめ5人が参加しました。

まず、訓練センターの橋口広報官による訓練の概略説明と質疑が行われました。

演習を指揮監督する機関である「陸上自衛隊教育訓練研究本部」が「真に戦える陸上自衛隊」実現のため2018年(平成30年)に新編されたことや、実動対抗演習で「攻撃」側と



「防御」側のそれぞれの作戦、実戦の評価をして“勝敗”を判定する「訓練評価支援隊」の役割や装備などについて説明がありました。

質疑の中で、今回の演習に参加している隊員は、訓練評価支援隊200人を含め全部で約2,000人ということがわかりました。(ここから10師団、5旅団、それぞれ800~900人程度が参加していると類推されます)

概略説明のあと場所を移動し、「訓練評価支援隊統制センター」内部の視察をしました。大小、いくつものコンピュータモニターやプロジェクター画面が並び、それぞれの部隊の配置や動き(一人一人の隊員の動きも)が分かるようになっています。

「戦い」を評価するため「レーザー交戦装置(通称バトラー)」が使われます。小銃だけでなく、機関銃、戦車砲、攻撃ヘリなどにも装着でき、発射したレーザー光線を敵側の兵器や兵員の「受光機」が感知し、命中したかどうか…敵の兵器を破壊できたか、敵兵を戦死させたか、重傷を負わせたか…などを判定します。

「戦死」した隊員は「生き返るのか」と尋ねたら、「生き返りません。そのあと演習には参加できません」とのこと。死体処理の訓練もするそうです。

対抗演習は、9月3日から9日までの1週間行われる予定になっています。途中の休暇・休憩はあるのかとの質問には、「始まったら終わるまで24時間×7日間、対抗戦が続きます。休みはありません。野戦だから地べたに寝ます」という回答でした。

想像以上に「実戦的・即応的」で、過酷な訓練であることが実感できました。

9月例会で平和盆おどりに代わる花火打ち上げを検証

13人の参加で主に「実動対抗演習」と「平和盆おどりに代わる花火打ち上げ」について論議しました。「花火打ち上げ」は、それぞれが悩みぬいたとりくみであったこと、56年間の歴史は重く盆踊りができないのであればせめて花火の打ち上げを…の強い思いが多くの人々の心にあったこと、ユーチューブでライブ配信ができ全国の仲間に喜ばれたことなどが話されました。体調が思わしくないなどで今例会に矢白別住人の方が参加できませんでした。矢白別住人の方のご意見もぜひ聞きたいという声もありました。